

# 新宮城下町遺跡

現地説明会資料

平成30年12月15日 13:30~

主催：新宮市教育委員会

公益財団法人和歌山県文化財センター

## 1. はじめに

新宮市教育委員会では、(公財)和歌山県文化財センターに委託して新宮城下町遺跡の調査を実施しています。調査箇所は、新宮城の西側に位置する旧丹鶴小学校の敷地になります。発掘調査は、新宮市文化複合施設の建設に伴うもので、平成28年に第1次調査として約1,200㎡の調査を実施しました。今回は第2次調査としてその西側で約3,500㎡の調査を実施しています。すでに江戸時代の遺構面(第1遺構面)の調査は終了し、現在は中世の遺構面(第2遺構面)の調査を行っているところです。



新宮城跡から調査地を望む

## 2. 中世の新宮について

新宮は平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけて、都から熊野三山に参詣する上皇や貴族などの人々ににぎわっていました。鎌倉時代以後も江戸時代はじめの浅野氏による統治がはじまるまでの長い期間、熊野三山の拠点として、また木材や木炭などの豊かな森林資源を背景にして活況を呈していたものと考えられます。とりわけ熊野川河口に位置し、さらには太平洋に面した半島の先端付近であることを考えれば、山間部の物資の集積だけではなく、東西日本を結ぶ中継地・物流拠点として栄えていたものと思われます。

鎌倉時代の文献資料に「新宮津」が登場しますが、これまでの調査においても港に必要な鍛冶施設や物資を貯える蔵であったと思われる地下式倉庫が数多く見つかっています。こうしたことから中世の新宮城下町遺跡は港湾としての機能を担った遺跡であった可能性が高いものと考えられています。



近代の熊野川河口風景(中瀬古友夫氏提供資料)

## 3. 調査の成果

現在の遺構面では写真のようにおびただしい数の遺構が見つかっています。大半は中世のものですが、この面で弥生時代後期の堅穴建物も見つかりました。中世の遺構としては貯蔵施設と考えられる地下式倉庫が10棟見つかっています。そのうちのひとつは3.4m×2.4mの長方形で、深さは1mほどです。火災で焼けたらしく床には炭化した建築部材が残っており、上部を支える柱が6本であることや根太と呼ばれる床板を支える部材が均等に置かれていることが判明しました。こうした遺構から数多くの遺物も見つかっています。山茶碗や常滑焼、伊勢地方で作られた土鍋など東海地方の焼き物のほか備前焼の甕やすり鉢、阿波(徳島県)や播磨(兵庫県)の土鍋など西日本の焼き物も数多く出土しています。そのほか中国製の白磁の壺や碗、青磁の碗や皿も多く、めずらしいものとしては朝鮮製の白磁も1点確認されています。このように量的に多いこと以上に各地の土器が出土すると言うバラエティに富んだ内容が大きな特徴です。



第2面遺構検出状況

## 4. まとめ

検出された遺構や出土遺物の総体から見ると、12世紀から16世紀に至るおよそ500年間もの長い間途絶えることなく続いてきた遺跡と言えます。なかでもとりわけ13世紀と15世紀の遺構・遺物が多く、この2時期に活況を呈していたことが窺われます。また出土遺物の豊富さからこの地が東西日本の接点、物流の拠点であることが判明し、当時の港湾都市の構造や海上交通を考える上でも重要な遺跡であることがあらためて判明しました。



中世の地下式倉庫跡760(焼けた床材が残る)



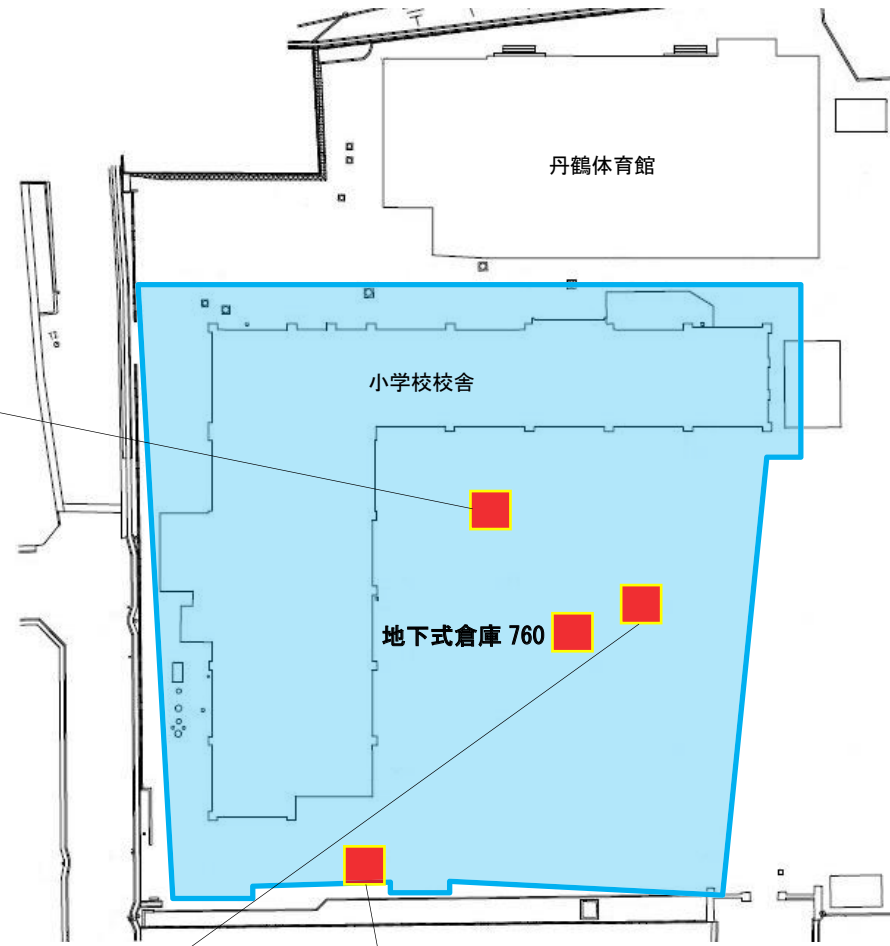
地下式倉庫 414 (室町時代)



同上石積状況 (室町時代)



地下式倉庫 300 (室町時代)



■ 第2次発掘調査範囲  
■ 写真掲載遺構の位置



土師器皿 (室町時代)



山茶碗 (鎌倉時代)



ミニチュア三足羽釜 (鎌倉時代)



中国製白磁壺 (鎌倉時代)



朝鮮製白磁皿 (鎌倉時代)



中国製青磁皿 (鎌倉時代)



古瀬戸ローソク立て (室町時代)



渥美壺 (鎌倉時代)



竪穴建物 634 (室町時代)

【新宮城下町遺跡】 第2遺構面の主な遺構と遺物